

湯浅の海が育んだ漁業・製網技術

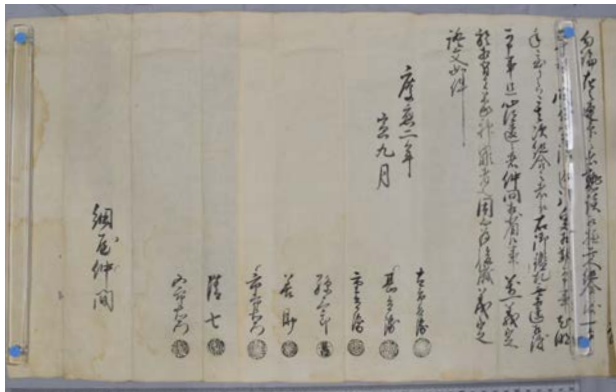
湯浅ばなし 06

海とのつながり

國津神社の創建に関わる社伝に、神様の魚釣りが出てくるなど、湯浅の人々と海との関わりは深いものがあります。湯浅党の時代には水軍が活躍し、産業が盛んになると海上輸送が行われ、江戸時代には肥料となる干鰯の原料としての鰯漁のため、全国各地に漁場を開拓していきました。顯國神社には、房総半島に移住した漁民たちが寄進した手水鉢が残されています。

湯浅の名産品「漁網」

漁民たちの活躍の背景には、湯浅の漁網がありました。丈夫な湯浅の漁網は、醤油や金山寺味噌と並ぶほどの湯浅の名産品でした。明治後期には、湯浅で11軒の製網業者がありましたが、現在では失われてしまいました。製網業者であった家に伝わった松宮家文書は、往時の製網業の様子を知る貴重な資料です。



松宮家文書

広川河口のシロウオ四つ手網漁

現在まで続く伝統的な漁業として、広川河口で春先に行われるシロウオの四つ手網漁があります。シロウオは、小さいハゼ科の魚です。川を遡るシロウオを、川底に置いた網を一気に引き上げることで生け捕りにする漁法です。



シロウオ漁（四つ手網漁）



顯國神社 手水鉢



阿瀬家住宅

